岡山理科大学紀要 第47号 B pp. 1-10(2011)

アルコール文学としてヨーゼフ・ロートを読む

三木　恒治

岡山理科大学応用数学科

(2011年９月30日受付、2011年11月７日受理)

序

「彼は同時代で最も強烈な酒豪作家」[1] と文芸評論家のＨ・ケステンはヨーゼフ・ロート（１８９４－１９３９）を評している。確かにロート最晩年の『酔いどれ天使の伝説』は、タイトルからしてロートとアルコールとの深い関わりを示唆している。また、他作品にも飲酒の場面が物語の重要な骨格を形成しているものが多い。ロートの酒量が増したのは第一次大戦後と言われているが、アルコール中毒症が進行したのは１９３５年以降のことであり、暴飲がたたって心筋麻痺、肝機能障害を患い、パリで客死という最期を迎える。[2] 彼の飲酒の背景としては、妻フリーデリーケ（通称フリードル）の精神的疾患、出版社との度重なる確執、ナチスの台頭によるユダヤ人の生活環境の悪化などが挙げられる。アルコールは、結果的にはロートに早すぎる死をもたらした。しかし、この時期に彼の代表作の多くが執筆されていることは注目に値する。アルコールは肉体的衰弱と引き替えに創造力とファンタジーを高揚し、人生に対する不安、自己懐疑を束の間忘れさせてくれるものだった。[3] そうした作家の姿を映し出すかのように、物語の主人公の多くは酒を嗜み、アルコールの世界に耽溺している。自伝的な背景を考慮に入れると、アルコールがロートの主要作品を読み解き、彼の生涯を考察する手がかりを与えてくれることは明らかだろう。ここでは主として『タラバス』『偽りの分銅』『ラデツキー行進曲』『１００２夜の物語』『酔いどれ天使の伝説』における飲酒の場面を取り上げ、その作品構成的な意味を探っていきたいと思う。

1

『タラバスーこの世の客』は、ロートがパリ亡命中に出版した初の長編小説である。主人公のタラバスは学生時代、ロシアの革命グループに参加、爆弾テロ事件に巻き込まれてニューヨークに逃れ、そこでも傷害事件の張本人となりロシアに舞い戻る。そして兵士として第一次世界大戦に参加、戦後は新生ポーランドの将校としてウクライナのコロプタに赴任、戦争の申し子となりポグロム（ユダヤ人襲撃、打ち壊し）を引き起こし、その後改心して後半生を贖罪の巡礼に捧げるという物語である。ロート本人は「文学作品としては失敗作だった」[4] と述べているが、革命、大戦に翻弄される動乱の時代の人間像が作品に凝縮されているところがドイツ語圏以外で意外にも好評を博し、ロートの代表作の一つに数えられている。[5] この作品では、物語を推し進める書き割りとして「アルコール」が効果的に使用されているのである。主人公タラバスの飲酒シーンに注目して、物語をふり返ってみよう。

タラバスがヨーロッパに舞い戻る契機となったのは、ニューヨークで居酒屋の主人と口論となり、それが暴力沙汰に発展、主人を殺害するに至ったためである。彼はニージー・ノブゴロド出身のカタリーナが働くバーに通い詰め、故郷に対する複雑な思いを抱きながら痛飲していたのだ。新世界アメリカには馴染めず、高層建築には憎しみすら覚える。しかしながら故郷も悪夢と結びついており、もはや安らぎの地ではない。過去を忘れようとするが果たせず、現在にも溶け込めない。そうした宙吊りの精神状態が彼をアルコールに走らせたのである。凶行後ヨーロッパへ向かう船中でも、彼はアメリカでの悪夢を忘れようとするかのように酒を煽る。兵士になってからは、ますます深酒にはまってゆく。トントン拍子に出世して将校として赴任したコロプタのユダヤ人酒場「白鷺亭」では毎晩のように乱痴気騒ぎを繰り広げるが、酒宴によっても彼の孤独感は癒されない。それでも酒場の主人クリスチャンポラーは、「暴君」タラバスの泥酔した眼差しに人生の疲労感と人間らしさを見出す。そうした主人公の閉塞した状況を打開するように、物語はポグロムでクライマックスを迎える。

共同体の紐帯を強めるのに、アルコールが効力を発揮するのは言うまでもない。それが一致団結と絶対服従を金科玉条とする軍隊であれば、尚更のことである。しかし戦争が終わっても国境地帯に取り残された兵士たちの胸の内は不満と不安で満ちており、アルコールは歪な形となって彼らを虜にする。いつものように

兵営を抜け出した兵士たちの小集団が三々五々ふくれあがり、意気投合しての酒宴となり、それが高じて暴動を招来し、果ては農民たちを巻き込んでのポグロムに発展するのである。その契機となった酒場の壁のマリア出現という奇蹟も、アルコールが招いた感情の高ぶりによる幻視が引き金だったかもしれない。ここでは集団的な憑依現象を引き起こすアルコールの作用を認めることができる。タラバスがこの暴動を阻止し得なかったのは、酔いつぶれていたためである。報告を受けたタラバスは混乱して判断力を失い、あまつさえ部下のコンツェフ軍曹の死の責任をクリスチャンポラーに転嫁し、彼を責め苛む。そして、その後タラバスは前非を悔いるかのように放浪の旅に出る。

登場するアルコールに注目すると――ニューヨークのバーでは、主人公がジンを注文する場面がある。ヨーロッパへ向かう船中で、彼はコニャックとウイスキーをしこたま飲む。「白鷺亭」ではワイン、ブランデー、ビール、焼酎、蜂蜜酒などが物語に彩りを添えている。『偽りの分銅』や『ラデツキー行進曲』で出てくる「９０度」のように、この作品では特定の種類の酒が物語のモティーフになっているわけではないが、タラバスの人生はアルコールに覆い尽くされている。アルコールが失態を招き、そこから逃れるためにさらに深みにはまってゆく。自分の道に破綻を来した主人公が酒場にやってきて、さらにその破綻を深めてゆくという悪循環の図式は、次章以降で考察するアルコールが関係するロートの作品では共通のものである。ただ『タラバス』では、その遍歴がもっとも目まぐるしい形で展開されている。

タラバスの人生の転機となっているのは、いずれも暴力事件である。そしてその都度「飲酒」の場面が設定されている。既に見てきたように、アルコールが物語を推し進める動因となっていることは明白である。彼が辿った人生の軌跡が絶えず異境の地をさまようというものであったことを考えると、環境の変化による疎外感、極度の緊張を紛らせるためにアルコールが不可欠であったことは想像に難くない。ただしアルコールが問題を解決してくれるわけではない。それどころかアルコールはさらなる悲劇を誘発し、それが度重なりタラバスを袋小路へと追いつめていったのである。精神的な要因とは別に、習い性となったアルコール依存症が、条件反射的に彼の肉体を突き動かし、暴力へと駆り立てていったという見方もできる。贖罪者となって諸国を流浪するという結末は少し唐突観があるが、そこへと変容してゆく主人公の病理的な姿をアルコールと絡ませて巧みに描いているロートの筆致には実体験が滲み出ているのではないだろうか。

2

１９３７年に発表された『偽りの分銅』は、前年取材旅行で訪れたガリシア地方が舞台となっている。ロートの故郷ブロディはガリシア地方の商業都市であり、第一次大戦中彼は志願兵としてこの地に駐留することとなった。幼年時代とともに戦場としてガリシア地方を体験したことがロートの創作活動に与えた影響は大きく、この作品でも国境独特の雰囲気が魂の風景として展開されている。[6] ガリシア地方の情景を読み解くメルクマールは、そのモザイク模様を成す民族分布図と混成的な性格である。[7] 当時のガリシア地方は、ハプスブルク家のオーストリア＝ハンガリー帝国の版図でありながら、ロマノフ朝のツァーが支配するロシア帝国と境を接し、ウクライナ、ポーランド、ドイツなどさまざまな民族が行き交う交差点に位置していた。交通の要衝にあることから、かつては帝国自由商業都市として繁栄を謳歌してきたが、１８８０年にはその指定を外され、ロートが生まれた頃には辺境の一都市にすぎなくなっていた。[8] また街の人口の大半を占めていたユダヤ人が文化的に大きな比重を占め、ロート一家もそこに帰属していた。ロートにとってガリシア地方は、美しい自然と他民族が共存している「平和の地」であると同時に、国家、社会的緊張を孕んだ「脅威と没落の地」という対極的なイメージが混在していた。[9]

主人公のアイベンシュッツは１２年間下級将校として連隊に籍を置いていたが、除隊して計測官として辺境の地ズロトグロート郡のシュワービーに赴任、その地で孤立を深めて破滅してゆく。シュワービーは、ガリシア地方の一都市として想定されている。ロシア国境のこの街はハプスブルク帝国の辺境であり、ここには脱走兵、詐欺師が出没し、密輸商が横行している。道徳、規律が欠如しているのは中央の権威が空洞化しているからであり、スラブの大海に浮かぶ孤島のようなガリシア地方は国家の解体の過程が明確に認識できる場所なのである。[10] こうした「無法」「いかがわしさ」の温床となっているのが「国境酒場」である。計測官とは国家権力の象徴でもある度量衡が遵守されているかどうかを監視する役人であり、法を周縁部へ適用し、あらゆる差異を無くして統一を計るというのが彼に課せられた使命である。当然のことながら、アイベンシュッツは厳しい取り締まりのため住人たちから疎まれる。時には意に反して非情な対応を迫られ、メンデル・ジンガーのような善良な市民の商店に容赦なく抜き打ち検査を入れなければならなかった。

帝国の行政の執行官である下級官吏や警察官は、辺境にあっては絶大な権限を与えられていた。物語ではアイベンシュッツやスラマがその任務についている。表向き民衆は従順を装っているが、誰も内実は無効と

化している帝国の権威などに敬意を払ってはいない。アイベンシュッツは、職務に忠実であればあるほど彼らとの疎隔を深め、正義の番人は悲しくて滑稽なピエロと化してゆく。私生活では妻の不倫に悩まされ、心の安らぎを得ようと足を運んだ「国境酒場」に取り込まれ、身動きが取れなくなってゆく。そこで知り合ったジプシー女オイフェーミアは彼を官能の世界へ引き込み、性的衝動が飲酒に拍車を掛けるようにして彼はアルコール地獄にはまってゆく。この「情熱」と「アルコール」という精神的、物理的双方の依存症が、秩序の世界からカオスの縁へと彼を突き落とす。[11] 妻の死、オイフェーミアの情夫ザメシュキンの出現によって孤独と絶望に打ち沈むアイベンシュッツであるが、最後は自分が獄へと送り込んだヤドロウカに待ち伏せされ、殴殺される。

主人公を最終的に死に追いやるのは、ならず者ヤドロウカの復讐の殴打であるが、彼の悲惨な最期はズロトグロート郡赴任の段階で決定していたようである。その予兆はここに到着したときの「雪」、「冷たい氷雨」という不穏な気象によっても暗示されている。[12] アイベンシュッツは、軍務で実感していたアイデンティティーを計測官という文官の職務には見出せなかったと思われる。軍制の中では、上意下達の縦割りのヒエラルキーが確固として幅を効かせている。その体制下で３６歳に至るまで純粋培養されたアイベンシュッツは、暗褐色の軍服に包まれているのが自分本来の姿であり、軍隊に帰属することで国家との一体感を確信していたようだが、退役してからはそれが失われたかのように周囲と齟齬を来してゆく。[13] 辺境の地にあって彼が生き残る道は、不正、腐敗を力ずくで抑え込むか、一切見て見ぬふりをするかのどちらかに限られた状況となるが、そのいずれにも彼は失敗する。

計測官に転じたことは、彼にとっては発展ではなく自己解体の第一歩だったのである。こうした自己分裂も、彼を自堕落な酒場通いへと駆り立てた要因となっている。しかも辺境の地に滞在することで、自身の境界にも突き当たることとなる。彼を包み込む違和感、疎外感は、周囲からだけではなく、自身との対決を迫られたことから来るものでもあったのだ。[14] それまでの秩序、仮象の領域から放り出されることによって、情念、暴力、享楽といった生の本質的な部分が、その獣性を剥き出しにして彼の前に立ち現れる。酒場の客は脱走兵、難民、放浪者、泥棒、穀潰しなどで構成されているが、そこでは「飲み」、「歌い」、「遊び」、「恋」といった人間臭い赤裸々な営みが繰り返されている。[15] 国家の論理とは無縁なカオスの世界を目の当たりにすることによって、アイベンシュッツはそれまで眠っていた自己を呼び覚まされたように情欲に身を任せてゆく。[16] 主人公を席巻する情念、野蛮性、狡猾さはオイフェーミア、ヤドロウカ、カプトウラークらの姿をとって現れているが、実のところ主人公の内面世界の写し絵とも解釈できる。彼は「国境酒場」で、自身についての真実に邂逅したのである。

帝国の国境では価値観、原理原則が流動化し、伝統が意味を喪失する。そこでは偶然、恣意の産物が人間を支配することとなる。その最も尖鋭な場所が「国境酒場」であり、アルコールが現実のさまざまな秩序を止揚し、境界を解体してゆく。ガリシアを舞台としたロートの作品では、「国境酒場」は繰り返し登場するトポスとなっている。１９２９年に発表された『沈黙の予言者』は、「国境酒場」が出てくる最初の小説であるが、国境から街への通り沿いにあり、 戦争勃発に際し屋根に赤十字を書き記して病院を装っている。[17] 巧みなカモフラージュは「国境酒場」の欺瞞的性格をよく表している。そこにはもぐりの医者や詐欺師まがいの書記官などが出入りし、無数の難民が偽札を手に入れて使用している。そして酒代を払えない者は遠国の監獄へ送り込まれる。また『偽りの分銅』と同名のカプトウラークも登場する。まさに悪評高い「国境酒場」のひな形がここでは提示されている。『皇帝廟』にもヤドロウカの酒場が出てくるし、『レヴィアータン』では悪評高いポドコルツェフ酒場がこれに相当する。次章で触れる『ラデツキー行進曲』で、主人公の同僚のデーマント軍医の父親は「国境酒場」のユダヤ人の主人である。「国境酒場」は市街地やシュテトル（ユダヤ居住区）には存在せず、いわば正常な居住地域の周縁部に設営されている。そこは市民社会のルールが通用しないアンダーグラウンドである。境界は地理的位相のみならず、人間性、倫理性の周縁をも形作っている。[18] そして酒場に足を運ぶ常連客を虜にするのが、「９０度」と呼ばれるウオッカまがいの強い焼酎である。これは法律で禁じられている密造酒であるが、管区警察の巡査ですらこれに目が無いという代物である。不正な分銅が使われていないかどうかを調べるために酒場に現れたアイベンシュッツは、初めは飲みたくてこの酒を飲んだわけではない。しかしヤドロウカの意図的な不正を目の当たりにするに至って、怒りを抑えるために立て続けに「９０度」を煽る。オイフェーミアの出現も、アイベンシュッツを「９０度」にのめり込ませる。妻が死んでひとりぼっちになってからは酒量も増し、明け方まで飲むことも稀ではなくなる。やがて彼は、「９０度」を飲んだ後では体中にアルコールが回って火のように熱くなり、飲まない時はアルコールへの欲求がやみがたく燃えさかるというアルコール中毒の典型的な症状を呈するに至る。「９０度」は職務に行き詰まった主人公を性的状況とたやすく結びつけ、袋小路へと追い込んでゆく。禁断の木の実にも等しいこの酒は、「泥沼」（ガリシア地方を舞台とした作品では頻繁に登場）、「コレラ」とともに彼を破滅へと追いやる闇社会、周縁の力の象徴ともなっている。

アルコールは人と人を結びつける社交の小道具として使われるケースが多いが、この作品ではむしろ社会から主人公を引き離し孤立を深める媒体となっている。

アイベンシュッツの悲劇は、計測官でありながら肝心要の人間の重み、尺度を測れなかったことである。人間は所詮「善悪」という二元論では割り切れない存在である。それが理解できない彼は、既に効力を無くした国家の法の論理に固執し、それがため時空を超越した不均一で形のないマージナル（周縁）の威力に屈してしまう。結局彼は「善悪」の彼岸を越えることはできなかったが、生と死の境目に至ってはじめて真実に目覚める。つまり、「偉大な計測官」である神を前にして、人間を境界から解き放つのは神だけであること、つまり「死」によってしか境界を乗り越えることはできないことを酩酊の淵で悟る。そのことは、ヤドロウカに殴打される前に彼が死への憧れを強めていたことからも窺える。「死」によってしか自己撞着を解決できず、救済がもたらされないという彼が辿り着いた結論は、アルコールが主人公にもたらした人生の真理の一片とはいえないだろうか。[19]

3

滅び行くハプスブルク帝国へのオマージュとなった『ラデツキー行進曲』は、ヒトラーが政権を掌握する前年の１９３２年に書き上げたとされている。まさに古き良きヨーロッパの崩壊を目前にして、ロートの万感の思いが織り込まれた最大の力作である。イタリア戦線での数多くの武勲に輝く国民的英雄を称えたヨハン・シュトラウスの名曲をそのままタイトルにしたこの長編には、作者が泥酔のあまり第４章の草稿をパリのタクシーに置き忘れたという逸話が残っている。[20] また公刊後、作品に殉じるかのようにロートは保守的なハプスブルク信奉者の度合いを強めてゆく。

Ｔ・マンの『ブッデンブローク家の人々』同様、物語は一個人にとどまらず、一つの時代、社会の終焉が家族の年代記風に綴られている。ソルフェリーノの戦い（この戦いが帝国凋落の端緒となった事実は暗示的である）で若き日のフランツ・ヨーゼフを救出した英雄の孫である主人公のカール・ヨーゼフ・フォン・トロッタ少尉は、帝国の運命を象徴するかのように、没落への道を辿ってゆく。彼は、部下の夫人との不倫が災いして辺境の狙撃大隊に転任する。それはロシア国境から２マイルしか離れてない国境の駐屯地であった。経緯は多少異なるが、周縁の地に追いやられ、そこで破滅するという構図は、『偽りの分銅』の計測官アイベンシュッツのケースと同じである。「シベリアの風が吹き抜け、異郷の風物がオーストリアの者を脅かす」[21] 過酷な環境にあって、トロッタ少尉も演習林の近くの「国境酒場」にしばしば足を運び、「９０度」に耽溺する。彼は飲んでいるときは不名誉な失敗、敗北感を忘れることができる。一時しのぎではあるが、たちまち生きるのが楽に感じられる。不向きな辺境での軍役に、アルコールが調和を与えてくれる気分となるのである。連帯付きのデーマント軍医は、不本意な決闘で命を落とすが、死の前に「もう少し早く火酒を覚えておけば良かったのに・・・残念です」[22] とトロッタ少尉に苦境を漏らす。それだけ国境は、飲まない人間には生きることを困難にする厳しい土地なのである。

トロッタ少尉は飲むと階級を問わず周囲の者が親しい存在に感じられるが、現実には将校と兵士たちの世界は、階級だけでなく生活環境も分断されており、将校クラブに出入りする者が「国境酒場」で兵士たちに混じって火酒を煽ることは通常ではあり得ないことだった。トロッタ少尉の飲酒も開放的な酒宴という形ではなく、飲み仲間はほとんどの場合同僚のヴァーグナー大尉に限られている。彼らは、人生の傷を嘗め合う負け犬のように、飲み交わすことで敗北感と恥辱を分け合っている。辺境にありながらそこに順応できず、かといって中央に戻ることもかなわない。閉鎖的な軍の体質は彼らの孤独をますます深め、複雑な思いの捌け口を無くしてゆく。こうした閉鎖性は帝国の規律を維持するのに貢献してきた部分もあるが、異文化が錯綜する辺境に暮らす者の身動きを取れなくし、腐敗へと追い込むこともしばしばである。トロッタ少尉の飲み方を通じて、帝国の盤石の体制の限界とそれが破綻した状況を垣間見ることができる。 またトロッタ少尉は彼とは対照的な画家モーザーともウィーンで酒を飲み交わすのだが、飲酒の席にはしばしば誰かの訃報がもたらされる。飲酒そのものが帝国凋落の兆候と位置付けされているのである。[23]

「死へと誘う毒気を放つ沼沢地」「憂鬱と頽廃そのものの地」とロートの作品ではロシア国境のガリシア地方がよく形容されている。「没落の予兆」としての沼沢地はガリシア地方の象徴的な風景であり、「黄金の穀物畑」や「雲雀のさえずり」といった牧歌的光景と好対照を成している。[24] 自然環境の相反性は、この地を訪れる者のアンビヴァレントな状況を増幅する。ここでは見通しよりも偶然に頼って生きることを宿命づけられるのである。[25] 『偽りの分銅』同様、国境は犯罪者やブローカーが暗躍する無法地帯でもあり、トロッタ少尉もカジノや酒場に入り浸り、賭博と「９０度」の虜になってゆく。賭博と飲酒は、どちらも周り

の世界をすっかり忘れていながら、実は周りの世界から忘れ去られているという本質があり、その部分が国境の周縁的な状況と通底している。彼は博打の借金が嵩み、逃げるようにして軍務を放棄する。一時農園の管理人となるが、やがて戦争の勃発とともに狙撃兵大隊に復帰し、最後は一兵卒のようにあっけなく流れ弾に当たり、戦場の露と消える。

前述したように、トロッタ少尉の辿る道筋は、計測官アイベンシュッツと似通っている。二人とも軍人としてのアイデンティティーを喪失して、中心から周縁へと追いやられ、そこの日常を逸脱した世界に取り込まれて破滅してゆく。彼らは、いわばドロップアウトの人間像を提示している。特にトロッタ少尉の場合、その素行からして明らかに軍人としての適性が欠落している。さらには幼年学校や伝統的な教練が効力を失った辺境の地で、完全に平均的な将校から滑り落ちてゆく。アイベンシュッツの場合、トロッタほどの人生の過失は認められないが、軍役を離れ文官に転じたときにアイデンティティーの崩壊を余儀なくされる。彼らの不適格性は、そのまま帝国の末路を物語っている。

無法地帯で暗躍する人物も、同名のキャラクターで登場する。例えば『ラデツキー行進曲』でカジノを仕切っている「カプトウラーク」は、『偽りの分銅』ではロシア脱走兵を海外へ逃亡させる人身ブローカーとして登場する。彼らは死に瀕している獲物に狙いを定めている烏のように、滅び行く帝国の終焉に出没し、主人公を破局へと誘う。また主人公が溺れてゆくアルコールは、いずれも「９０度」と呼ばれる火酒で、これを飲むと「頭には来ないで、ただ足はフラフラとなり」[26]、また血の巡りがよくなり、吐き気やむかつきがなくなり、食欲が旺盛になるという鎮静剤のような効果をもたらす。「９０度」は、あたかも麻薬のように、対症療法的に現実から彼らの目を背けさせ、束の間の安らぎと快楽を提供してくれる。しかしそれは一過性の幻覚であり、実際には彼らはますます現実から乖離し、孤立を深めているのである。

「緑の森と青い丘からなる高貴な環で囲まれている」[27] 国境地帯は神聖さといかがわしさの二面性でもって彼らを包囲している。出口なしの世界で正面突破に失敗した彼らを待ち受けていたのは「国境酒場」であり、アルコールの中で黙示録的光景が開示される。国家の論理が溶解し、偶然と恣意が支配する世界で二人に残された選択肢は神の摂理に従うことであり、それが可能となるのは「死」を通してのみである。神を祝福する「アーメン」を折々唱えながら進軍するトロッタ少尉は、最期もこの言葉を口にしようとして息絶える。『偽りの分銅』『ラデツキー行進曲』両作品とも、締め括りでは天上の世界が導入され、神だけが人間を境界から解き放ち救済することができるという構図となっているのである。

4

『１００２夜の物語』は、前三作とは異なりウイーンを中心に展開され、華やかな社交界と貴族社会の裏側の秘話めいた物語となっている。３７年には校了していたと思われるが、ロートの遅筆から出版社とのすれ違いが生じ、３９年１２月になってやっと発刊された。その半年前に亡くなっていたロート本人は、自著の刊行を見ることがなかった。[28]

ヨーロッパを巡幸したペルシャのシャー（国王）が、ウイーンでW伯爵夫人を見そめて夜伽の相手にと所望する。騎兵隊長タイティンガー大尉は、夫人と瓜二つで自分の愛人でもある娼婦のミッチー・シナーグルを身代わりに差し出し、その場を丸く収めようとする。彼にとって立身出世の手だてでもあったはずのこの企図は、後にふとした偶然から真相が発覚し、大尉はシュレージエン地方へ転任となる。しかし彼はそこでの生活に馴染めず、カルパチアの所領に隠棲する。そこの農場が破産し、その後軍隊に復帰する誓願も却下され、行き場を失った彼はあえなく自決するという幕切れとなる。

物語は、没落エリートの顛末記という『ラデツキー行進曲』と似通った内容となっているが、ここでは不幸な状況が因果の糸で手繰り寄せられ、連鎖劇のように展開する。[29] タイティンガー大佐は自らの弄した策のため死に追い込まれ、ミッチーは大尉と別れて犯罪に手を染め、獄につながれる。出獄後も悪の世界から抜け出すことができない。ミッチーの置屋の女主人マツナー夫人も大金を手にするものの、体調を崩してあっけなく亡くなる。一つの出来事を軸にして、周囲の人々が運命の歯車に巻き込まれるようにして破滅してゆく様が、諷刺と精確な観察を交えた冷静なタッチで描かれている。[30]

物語の主な舞台は辺境のガリシアではなく、帝都ウイーンである。ウイーンの裏社会を思わせる人物は登場するが、「国境酒場」、そこに出没するいかがわしい人物群はここでは姿を見せない。「飲酒」の場面も、物語の転回点を形成する主軸というよりも、貴族世界の社交を成立させている背景として設定されている。人間関係を潤滑にするための酒宴は、ウイーンでは舞踏と並んで不可欠のツールである。そして酒を飲まない人間は、ここではネガティブに描かれている。フ

リートレンダー教授は人生の意味を解さない無粋者と見なされているし、W伯爵の嫉妬深さは酒を飲まないことが原因とされている。もちろんここでは辺境の火酒「９０度」ではなく、ワイン、ヘネシー、コニャックが中心である。またガリシア地方を舞台とした作品のように、アルコールが主人公の実存的状況と直接つながるものではない。無聊の慰め、憂さ晴らしという日常の次元での飲酒の場面は数多く出てくるが、性衝動、アルコール依存症といった病理的色合いは薄い。酔いつぶれて人事不省に陥る場面もない。『偽りの分銅』のような孤独の中での深酒というより、多くの場合社交の小道具、人とのつながりを確認する手段としての意味合いが強い。印象的なものとしては、大尉が部下のツェノーヴァー主計少尉としばしば飲み交わす場面が挙げられる。『ラデツキー行進曲』でもトロッタ少尉が赴任地にあってヴァーグナー大尉と一緒に酒場に頻繁に出かける場面が見られたが、彼らの織りなす酒宴は、逆境にあって友情の絆を深めるといった様相を呈している。特にツェノーヴァー少尉が辺境のブロディの狙撃大隊に赴任する前夜に二人がしみじみと飲み交わす酒は、まるで兄弟の契りを固める杯のようである。

この作品では、多種類のアルコールが物語に彩りを加えている。最初の飲酒場面では、タイティンガー大尉がシャーを乗せた特別列車を待っている間、駅舎でヘネシーをちびりちびりと飲んでいる。[31] このヘネシーについては、『ラデツキー行進曲』でトロッタ少尉の父親が「私はいつもヘネシーを飲んでいるよ」[32] と安コニャックを注文した息子を窘める場面がある。その後、少尉は国境にやってきた父親から「くれぐれも火酒には気を付けるように」[33] 注意される。ヘネシーは帝国の上流社会のステータスとしてロートの作品ではウイーンと辺境部を切り離す小道具となっている。タイティンガー大尉は、所領とウイーンを移動する際にもしばしばヘネシーを口にする。大尉の場合、一人で飲む場合はたいていヘネシーのようであるが、ツェノーヴァー少尉と飲み交わすときは、コニャック、フェースラウ産のワイン、スモモの蒸留酒であるスリボビッツなどさまざまなアルコールが登場する。銘柄がけっして豊富というわけではないのだが、この作品には帝国の領土の広範さを思い起こさせるさまざまなアルコールが取り入れられている。種類の多さといえば、トロッタ少尉とヴァーグナー大尉がカプトウラークのカジノで賭博に負けた後、コニャックに「９０度」を混ぜ、これにポーランドの地ビール「オコティエム」を注いで飲む場面がある。[34] 二人のやけっぱちな気分と軍人から脱落してゆく状況を、アルコールの雑多な種類と飲み方で巧みに表現している部分である。 こうしたある意味不作法な飲み方は、タイティンガー大尉には見られない。これは、彼が根っからの軍務不適格者ではないこととも関係している。

「９０度」がロートの作品で重要な役割を果たしていることは、既に述べた。ロシアとの国境のホテルを舞台とした『ホテル・サヴォイ』のバーで常連客たちが集まって飲むのもたいていこの火酒で、「９０度」はもっぱら「国境酒場」で登場し、辺境の代名詞となっている。『１００２夜の物語』で、この兵士や農民が好んで口にする「９０度」が登場することはほとんどない。ウイーン社交界と「９０度」は、けっしてロートの作品の中で相容れることはないのである。

作品構造的な視点でこの作品のアルコールに注目してみると、前章までの三作品に見られたような主人公の実存状況を規定するような動因的性格は影を潜めている。アルコールは、ここでは主として「部下の労をねぎらう」「仲間意識を確認し、親交を深める」といった日常的な文脈で登場し、連帯感、絆の強化の手段が中心的な役割を果たしている。さらにはアルコールの種類の多彩さが社交界に華を添え、同時にハプスブルク帝国の階級社会を際立たせているところが作品の大きな特徴となっているのである。

5

『酔いどれ天使の伝説』は、ロートが亡くなる直前の３９年の作品で、亡命地のパリを舞台としている。これまで見てきた主人公が奈落の底に沈んでゆく作品とは基調が異なり、楽観的な気分が物語を支配している。[35] 主人公アンドレーアス・カルタクはセーヌ河の橋の下に寝泊まりする無宿者で、見知らぬ紳士に恵んでもらった金を、その都度飲酒で使い尽くす。彼が足を運ぶのは、セーヌ河畔の街路の酒場や、サントマリー寺院の筋向かいの酒場、カトル・ヴァン通りの「タリ・バリ亭」(『ある殺人者の告白』など、ロート作品ではよく登場するロシア、アルメニア料理の店）であったりする。ここでは、「ペルノー」が飲まれるケースが多いのが目を引く。「ペルノー」はアブサンの代用酒であり、黄緑がかった５０度前後の強力なリキュールである。アブサンはニガヨモギから搾り取った液にアルコールを混ぜて作った蒸留酒であるが、中毒性の危険を伴うためフランスでは１９１５年に製造販売を禁止されていた。その代用酒「ペルノー」は第一次大戦後のヨーロッパで広まり、戦争で疲弊し虚無感に包まれた人々の心の空洞を埋めていた。ヘミングウエイの『日はまた昇る』も当時のパリを舞台としており、「ペルノー」が時代のアンニュイな気分と相俟って効果的に使用されている。[36] とはいえ、早朝から深夜まで営業する店が多く、酒が生活に溶け込んでいるパリでは、人々は他種類のアルコールを堪能していた。「９０度」が「ガリシア」の地域性と強く結びついていたのとは意味合いが異なり、「ペルノー」だけが取り立てて大都会パリの象徴となっているわけではない。しかし、この時代営業許可の下りていない店も含めると三千軒近い酒

場が立ち並んでいたセーヌ河畔の歓楽街の頽廃的な雰囲気、人間模様を映し出すのに貢献していたアルコールは、まぎれもなくこの「ペルノー」である。『酔いどれ天使の伝説』でも、泥臭さを感じさせるこの酒が主人公の置かれた「浮浪者」という境遇を浮き彫りにするのに一役買っていることは確かである。

この作品は、晩年のロートの酒浸りの状況とあまりにも酷似しているという見方が一般的である。アンドレーアスは、借りた金は返さなくてはならないという自尊心と誇りは備えている。執拗なまでに紳士に返済先を確認するが返す術もなく、そのまま酒に消えてしまう。亡命地にあっての窮乏とアルコール依存、それでも創作に精を出さなければならないロートの逼迫した状況を垣間見ることができるようである。ただし作品はメルヘン調で綴られ、実現できない願望が成就される形となっている。リアリズムの尺度では奇蹟と呼ぶしかない紳士の出現や、見知らぬ踊り子との一夜の逢瀬等が繰り広げられる。主人公は、現実の因果関係から解放されたかのようにメルヘンの世界を浮遊する。紳士の恵みによってたらふく飲み食いした彼は、熟睡によって生気を与えられ、それまで失われていた誇りと世界とのつながりを獲得する。ホテルやレストランの客となったり、与えられた仕事に励んだりすることで、社会的枠組みの中での自己を回復してゆく。[37] そして他者から認知されることで社会的自我が芽生える。第二章で初めてアンドレーアス・カルタクという彼の名前が明らかにされたり、レストランでウエイターに敬意を払われたりすることは、その証である。また以前の恋人や同僚、幼馴染みと出会い、過去を再発見して時間の感覚を取り戻す。一方、時間との出会いは、「死」との邂逅でもあった。[38] 浮浪者として存在感を欠き、社会性を喪失していた時は拒絶されていた「死」が、酒場で「聖テレーズ」（借金を返済するはずの相手、実際には見知らぬ少女）を見つけたアンドレーアスに忍び寄る。返済はかなわなかったものの、彼は「債権者」に向かって手を差し出すようにして力尽きる。彼の突然の死は、現実世界との訣別を意味している。しかしそれはむしろ恩寵の世界への参入であり、現実に行き詰まった彼が体験しうる最大の幸福であったのかもしれない。[39] 死によって自由となり、アイデンティティーを再獲得できるという構図は、ロート自身の願望であったともいえよう。人間の営みは、所詮は獲得と喪失、試みと挫折、衝動と抑制、幸福と幻滅の繰り返しに過ぎないという人生の真実が、ここではアンドレーアスの飲酒という行為を通じて浮き彫りにされている。[40]

アンドレーアスのパトロンとして「聖テレーゼ」が想定されている筋立ては、ロート晩年のハプスブルク讃歌とカトリックへの傾倒を強く示唆している。そしてこのキリスト教的意匠は、ロートがユダヤの出自を忘れ去ったのではないかという疑念も呼び、作家の宗教的民族的アイデンティティーを問い直す議論を引き起こした。[41] しかし、流浪の民がキリスト教の聖女を頼みとするという構図は、ロートがカトリックとユダヤ教の共生を夢見ていた証と受け止めるのが妥当な解釈ではないだろうか。物質主義が蔓延る２０世紀にあって、信仰の世界から離れた自我が分子化し、恣意と偶然の産物へと退化する様を、本稿ではロートの作品の主人公が辿った運命と重ね合わせて見てきた。彼らはいずれも伝統の領域から閉め出され、孤立化の呪いをかけられているかのように振る舞う。そうした呪縛から彼らを解き放ち、神の世界へと帰還するのに、アルコールがここでは介在し、主人公を至福の世界へ誘うのに重要な役割を果たしている。

ロートはアルコール中毒の末期にあって、自身の悲惨な死を覚悟していたに違いない。[42] 酒を飲むためには、まず先立つものは金である。本当は与えたいのに人から金を受け取らなければならないことは、作家の矜持、誇りを著しく傷つける。それでも援助を乞わないといけないという現実を、この作品では逆に神の世界での新しい生への第一歩と位置付け、そのネガティブな意味を否定しようとしたように思われる。[43]「死」は自分自身へと帰還する道であり、その過程で名誉、自尊心が回復され、過去が再発見される。ロートにとっての癒しは、世界へ再び組み込まれることを超えて、自己に真の存在の意味を賦与することにあったのではないだろうか。彼のアルコール依存症そのものが、こうした憧憬への自己告白とも言えよう。物語の最後の「神よ、私たちみんなに、酔いどれの私たちに、かなうことならかくも美しく軽やかな死を与えたまわんことを」[44] という語り手の言葉は、アンドレーアスの死に対する羨望のコメントであると同時に、自身の安らかな死を願うロート本人の祈りともなっている。[45]

結語

アルコールが文学作品のテーマとされている作家は少なくはない。特に禁酒法時代のアメリカで目立つのは皮肉な現象である。例えばヘミングウエイ、フォークナー、オニールなど、著名な者だけでも枚挙にいとまがない。ただし、アルコールが創作活動にかならずしもプラス効果をもたらしたとはいえない。ヘミングウエイは晩年アルコール中毒のため創作活動に支障を来し、そのため自殺に追い込まれたという。またフォークナーが過度の飲酒にのめりこんだ後期の作品には、

初期のものほど輝きが見られないというのが一般的な評価である。[46] ロートの作品をアルコール文学と見なすことができるかどうかについては議論の余地があるかもしれない。自伝的事実としては間違いなくロートは「酔いどれ作家」であるが、上述のアメリカ文学のように、酒の味覚についての細かい叙述や、登場人物が酒を堪能している様子の描写はきわめて少ない。しかしアルコールが物語の基調となり、作品構造に大きな影響を与えていることは間違いあるまい。また本稿で扱った作品の主人公、タラバス、アイベンシュッツ、フォン・トロッタ、タイティンガー、アンドレーアス・カルタクの５人は、いずれもロート自身の自伝的部分を色濃く反映している。

ロートの場合、アルコールによって健康を損ね、寿命を縮めたのは確かであるが、芸術性を損ねることはなかったといえよう。[47] 『ラデツキー行進曲』のトロッタ少尉は退役してからアルコールから解放されたが、ロートの場合はそうはいかなかった。むしろ失意のうちに迎えたパリでの亡命生活でアルコール依存度が強まり、晩年には朝食の時に焼酎とワインを大量に飲んでいたという。[48] ただし、それと比例するように創作意欲が高まっていったところが、ロートの真骨頂である。『酔いどれ天使の伝説』について、ロート自身がアルコールと芸術的創造力の合作であったことをほのめかすようなコメントを残している。[49] 陶酔と愉悦が作品の中に込められていなければ、ロートにとって創作活動は無意味なものにすぎなかったのかもしれない。ロートの主要作品が酒量の増えた作家の後半生に集中していることを考えると、彼の創作はアルコールがもたらす創造性の煌めきと枯渇の危ういバランスの上に立っていたように思われる。その意味では、ロートは早すぎる死によってそのバランスを全うできたのではないだろうか。[50]

【ＴＥＸＴ】

Joseph Roth Werke 5 Romane und Erzählungen 1930-1936 Herausgegeben und mit einem Nachwort von Fritz Hackert 1990 Verlag Kiepenheuer &Witsch, Köln (以下 Bd.5 と略記)

Joseph Roth Werke 6 Romane und Erzählungen 1936-1940 Herausgegeben und mit einem Nachwort von Fritz Hackert 1991 Verlag Kiepenheuer &Witsch, Köln (以下 Bd.6 と略記)

（注）

1)Vgl. Kesten, Hermann: Meine Freunde die Poeten. Vienna Kindler, 1953 S.174

2)Vgl. von Sternberg, Wilherm: Joseph Roth Eine Biographie. Kiepenheuer und Witsch, Köln 2009 S.446

3)Vgl. Mornin, Edward: Drinking in Joseph Roth's Novels and Tales. In: The International Fiction Review, 6. No. 1, 1979 S.80

4)Vgl. Roth, Joseph: Briefe-Joseph Roth; Briefe 1911-1939 hrsg. und eingeleitet von Hermann Kesten. Köln/Bonn 1970 S.402

5)Vgl. von Sternberg,W.: a.a.O. S.430

6)Vgl. Klańska, Maria: Die galizische Heimat im Werk Joseph Roths. In: Joseph Roth. Interpretation Rezeption Kritik, edited by Michael Kessler and Fritz Hackert. Tübingen; Stauffenburg, 1990 S.144

7)Vgl. Klańska, M: a.a.O. S.149

8) Vgl. Dohrn, Verena: Verfallen wie in Brody: Joseph Roth und Isaak Babel-Schriftsteller im Grenzland. In: Neue Rundschau, Bd-101(1990), S.55

9)Vgl. Klańska, M.: a.a.O. S.154

10)Vgl. Klańska, M.: a.a.O. S.153

11)Vgl. Maier, Thomas: Auf der Suche nach dem verlorenen Maß: Beim Lesen von Joseph Roths Erzählung „Das falsche Gewicht", In; Literatur für Leser, 1999 S.34

12)Vgl. Maier,T.: a.a.O. S.30

13)Vgl. Göte, Vilma: Grenzen und Entgrenzungen: Joseph Roths „Das falsche Gewicht". In Transcarpathica, Bd. 5-6(2006-7), S.225-226

14)Vgl. Göte,V.: a.a.O. S.230-231

15)Vgl. Beug, Joachim: Zu einem literarischen Topos. In: Co-existent Contradictions: Joseph Roth in Retrospect. Papers of the 1989 Joseph Roth Symposium at Leeds University to commemorate the 50' aniversary of his death, edited by Helen Chambers, Riverside, CA: Adoriane Press, 1991 S.160-161

16)Vgl. Beug, J.: a.a.O. S.156
17)Vgl. Beug, J:: a.a.O. S.151
18)Vgl. Beug, J.: a.a.O S.153
19)Vgl. Göte,V.: a.a.O S.234
20)Vgl. von Sternberg,W: a.a.O. S.394
21)Vgl. Bd. 5, S.282
22)Vgl. Bd .5, S.235
23)Vgl. Mornin, E.: a.a.O. S.83
24)Vgl. Klańska, M.: a.a.O. S.145
25)Vgl. Bd. 5, S.257
26)Vgl. Bd. 5, S.295
27)Vgl. Bd. 5, S.257
28)Vgl. von Sternberg, W.: a.a.O. S.470
29)Vgl. von Sternberg, W.: a.a.O. S.473
30)Vgl. von Sternberg, W.: a.a.O. S.473
31)Vgl. Bd. 6, S.359
32)Vgl. Bd. 5, S.191
33)Vgl. Bd. 5, S.216
34)Vgl. Bd. 5, S.308
35)Vgl. Mornin,E.: a.a.O. S.84
36)森岡祐一他著、「酔いどれアメリカ文学」 英宝社 １７０－１７１頁参照
37)Vgl. Pikulik, Lothar,: Joseph Roths Traum von Wiedergeburt und Tod: Über die Legende vom heiligen Trinker. In: Euphorion: Zeitschrift für Literaturgeschichte, 1989. S.221
38)Vgl. Pikulik, L.: a.a.O. S.222
39)Vgl. Pikulik, L.: a.a.O S.224
40)Vgl. Pikulik, L.: a.a.O. S.228
41)Vgl. von Sternberg,W.: a.a.O. S.480
42)Vgl. Pikulik, L.: a.a.O. S.225
43)Vgl. Pikulik, L.: a.a.O. S.215
44)Vgl. Bd. 6, S.543
45)Vgl. Pikulik, L.: a.a.O. S.225
46)Vgl. von Sternberg, W.: a.a.O. S.216
47)Vgl. von Sternberg, W.: a.a.O. S.216
48)Vgl. von Cziffra, Geza: Der Heilige Trinker. Erinnerungen an Joseph Roth. Frankfurt am Main/Berlin. 1989. S.13
49)Vgl. von Sternberg, W.: a.a.O. S.217
50)Vgl. von Sternberg,:W.: a.a.O. S.219

Joseph Roth und „Alkohol"

Koji MIKI

Department of applied mathematics
Faculty of Science
Okayama University of Science
Ridaicho, kita-ku 1-1 Okayama 700-0005, Japan

(Received September 30, 2011; accepted November 7, 2011)

Dieser Aufsatz behandelt das Thema „Alkohol" im Werk Joseph Roths. In den Hauptromanen Roths, z. B. *Tarabas, Das falsche Gewicht, Radetzkymarsch, Die Geschichte von der 1002 Nacht,* und *Die Legende vom heiligen Trinker,* spielt der Alkohol eine wichtige Rolle. Roth präsentiert oft seine Heimat Galizien als unzivilisierten, wilden Grenzraum. Die Grenzschenke dieser Gegend ist oft als Raum des Identitätswechsels, der unbegrenzten Möglichkeiten dargestellt. Dort entfalten sich die transitorischen Grenzerfahrungen. Die Hauptfiguren geraten in die weltverlorene Einsamkeit und erliegen der Trinksucht, die sie zur moralischen und physischen Zerrüttung führt und ihre Identität in Frage stellt. Roth selbst war ein schwerer Alkoholiker. Alkoholismus stimuliert die Kreativität und Imagination des Autors. In seinem spätesten Roman *Die Legende vom heiligen Trinker* spiegelt sich das Zusammenspiel vom Alkoholismus und künstlerischen Schaffen. Roth hat dieses Gleichgewicht auf Kosten eines frühen Todes halten können. Der Erzählung ist der religiöse Charakter verliehen und der trinksüchtige Held, dessen Vorbild Roth selbst sein kann, scheint sich in den Stand der Heiligkeit zu heben. Ich möchte hier das Werk Roths im Zusammenhang mit dem Alkoholismus lesen.